

「サブカルチャー」において歴史を論ずる意味に関する考察——大塚英志の言論におけるおたく批評の位置づけを事例として

永田大輔
無所属

1 目的

サブカルチャー研究で対象の来歴が振り替えられることは多いが、そこで好事や起源を知ること以上の意味で「歴史を論ずること」自体の意義は十分に検討されて来なかった。

本報告は、大塚英志の言論において最も中心的な議論として「届いてしまう」ことにどのように向き合うかという主題があることを議論し、その枠組みの中で「サブカルチャーの歴史」が彼の中でどのような位置を占めるのかを明らかにする。その上で「サブカルチャー」をめぐる議論・研究において「歴史を問うことの意味」自体を問うことの意義を議論する。

2 方法

サブカルチャーに関する歴史自体を扱うことの意義について焦点化した批評家として大塚英志の議論を通時的に蒐集し分析する。大塚の言説は、多岐に渡り統一性がないと評価されることが多いが、それを一貫した視点で読み解くことが重要な意義を持つ。その際に重要な枠組みとなるのが「サブカルチャー」と「歴史」の関係である。彼の議論を読解する際に彼が大きな影響を受けたと主張する江藤淳の議論との関連に焦点を当てる。

3 内容

本報告はサブカルチャーと歴史という観点から、大塚英志の言論を読む。彼の言論は、サブカルチャーと関連して少女・おたくという主体の問題を消費社会との関連で論じたものの他、論壇・文壇での活動・実作教育など多岐に渡る。これは、戦後に歴史を語る力を奪われた日本という国で言葉から主体を考えねばならぬという江藤淳の戦後民主主義と文学との関係をめぐる議論を引き継ぐものと解釈することもできる。しかし、大塚のおたくへの拘りは江藤の枠組みで解釈するには過剰に見える。サブカルチャーは大塚によると（おたくという言葉が連続少女殺害事件の際に文脈を超えて社会問題化されたように）文脈なく届く知であり、だからこそ説明のし直しが要請される。それを説明するため、サブカルチャーにおける歴史という視点が要請され、その根拠づけとして江藤の議論が用いられたのである。

おたくという言葉は現在若者の多くが自認する「一般的」なカテゴリーであり、おたく的とされた表現も広く行き渡っている。このことは一見するとおたくという集団の特性が失われてきているとされ、歴史的な議論をする意義が弱まるように見える。しかし、大塚の議論を振り返ることでわかるのはおたくという言葉が一般化（＝「届くこと」）することに向き合うことはよりアクチュアルになり、歴史を振り返る意義は増していくことである。

4 結論

このように本報告では、サブカルチャー研究で自覚的に歴史を振り返る意義について大塚英志の言説を事例として検討し、サブカルチャーの歴史を論じることの意義をそれぞれが反省的に捉え返すこと自体の意義を確認した。これは好きなものだから調べるということを超えた形で「社会的なもの」と「文化的なもの」の関係を考えるうえでの歴史の意味を考え直すことに繋がる。

文献

浅野智彦,2011,『趣味縁からはじまる社会参加(若者の気分)』岩波書店.

江藤淳,1994,『閉ざされた言語空間——占領軍の検閲と戦後日本』文藝春秋.